

玄関を開くと、薄暗い中から冷えた空気が漏れだしてきた。

背後の夏の日中の太陽と相まって、背中はジリジリと焼かれているのに、肩筋に滲んだ汗が薄ら寒い。それに、ため息をこぼす。

別段、驚くまでのことでもないし、呆れた訳でもないけれど。でも、流石にこれは酷い気がする。庭先から、二階のベランダから、室外機の頑張る音が低く聞こえてきていた。

扉を開けて、靴を脱ぐ間にも既に、汗で濡れたシャツが冷たくて、かすかな空気の流れが敏感に感じられる。

それは、開いたままになった廊下の奥から外に向かって押し出されてきているようだった。

逆らうように進んで、真っ暗に閉め切られたリビングの前で、また一度立ち止まる。

「ただいま」

一応、声をかけてみたが、反応は返ってこなかった。期待はしていなかったで、そのまま部屋に入り、照明のスイッチを指先の感覚だけで探す。

室内に物音は一切なく、もしかしたら今は二階の方にいるのかもしれない。

(……それでも、ならせめてエアコンくらいは消してから移動してもいいんじゃないだろうか)

彼女のこういうところがやっぱりお嬢様なんだとつくづく実感させられる。

スイッチが、中々見つからない。

(……それにしたって、いくらなんでも設定温度が低すぎやしないだろうか)

最低温度はたしか18℃くらいまで下げられたはずだけど、1日のピークの暑さの中を歩いてきたためか、それよりもずっと冷たく感じて、こんな中でよく平気で過ごせるものだと、反対に感心してしまう。

ようやくに見つけたスイッチを押し込んで、一瞬の明滅の後に、見慣れた自宅のリビングがくつきりと輪郭を取り戻した。

そして、その中心。ローテーブルの下で仰向けに横たわる彼女を見つけた。

突然明転した天井にまぶしげに手の甲を翳しながら、短くうなっているのが聞こえてくる。

「ただいま」

再度繰り返すと、今度は返事があった。

「……おかえりなさい。……………それとも私にする？」

「前半を端折り過ぎだ」

「どうやら、つい今まで眠っていたらしく、それほどひねつてもいない出迎えの言葉が気怠げに下から届く。

「というか、普通には意味不明だったので、半分寝言みたいなものだろう。そして僕が帰ってきたからといって、フロリングの床に寝た体制のまま、起き上がるという意思はなさそうである。

「……あら、私としたことが。ごめんなさい。言い直させて」

「そう宣言して、

「——おかえりなさい。ご飯にしてくれる？ お風呂にしてくれる？」

「以外とこちらが被依存的な労働要求が、変なトーン一つ違う猫なで声でやってきた。

「そんなに腹減ってるのか？」

「いいえ。べつに。それほどでもないわね」

「なら言うな」

「お風呂には入りたいわ」

「自分で沸かせ」

「嫌よ。面倒なもの」

「……なら、僕も嫌だ」

「面倒だから？」

「面倒だから」

「なら仕様がないわね。……でも私、寝ている間に身体が冷えちゃって」

「エアコン消せよ」

「何それ？ 新手の冗談？ 笑えないわ」

「あと、服着ろ」

「私にしないの？」

「……もう、勝手にしてくれ」

「あら、そう」

「そう言っ、漸々半身を起き上がらせた彼女は、「ピツと」、エアコンをオフにした。

「……どうでもいいよ」

「寛容なのは、いいことね」

「どうやら、今のやり取りで完全に目が覚めたらしい彼女は、口元を緩ませ、肩越しにこちらを振り返ってから、その流し目の先に、

「お帰りなさい」

改めて帰宅を労う言葉を口にするのだった。